

# 札幌市立中央小学校の取組

(学校ホームページ <http://www.chuo.sapporo-c.ed.jp/> )

## 1. 学校の実態・地域性等

本校は、市街地の近くに位置し、校区内を幹線道路が何本も貫く地域である。通学路の大半は除雪が行き届いているが、反面、大雪などによる渋滞も身近に感じられる地域でもある。また、校区が大通公園に隣接していることから、低・中学年は毎年のように雪まつり見学に出向き、親しみのある地域の行事となっている。児童数もあまり多くないので、低・中・高学年のブロック体制での活動もわりと活発であるが、ここ数年児童数が増えているため、活動のスペースなどを考慮し、学年単位での活動に切り替えているものもある。

## 2. 実践 1

### (1) 単元名

4年 総合的な学習 「札幌市と雪」 (18時間扱い)

### (2) 目標

雪とのかかわりについて考えたり体験したりする活動を通して、札幌市にくらす人々が雪を活用することによって魅力あるまちづくりをしていることに気付き、雪と自分たちの生活を結び付けて考えることや札幌市がどのような雪対策を行っているかを知ることができるようにする。また、雪に親しみをもって調べたり表現したりする力を育てる。

### (3) 取組の様子

#### ① 雪について知る

札幌管区気象台を訪ね、職員のみなさんから話をいただいたり、観測の機器に触れたりした。天気予報のしくみについて興味・関心を高めるとともに、雪が降る仕組みについての知識を身につけることができた。

天気予報や地震観測などにもお話は及んだが、「どちらの方角から風が吹いてくると雪が降りやすいのですか?」「積雪量はどうやって測るのですか?」「雪の結晶は何種類あるんですか」など、雪に興味をもって調べようとする意欲が見られた。

#### ② 雪のあるくらしを支える努力にふれる

中央区土木センターに出前講座をお願いした。除排雪のしくみや問題点など、プレゼンやDVDを通してわかりやすくお話しいただいた。

普段、登下校時に歩く通学路の歩道がどのように除雪されているか、またその作業が深夜早朝などに行われることを知り、自分たちの安全を守ってくれている人の苦労を感じることができた。DVDは、札幌市の雪対策を分かりやすくアニメにしたもので、子どもたちも高い興味・関心をもって視聴した。また、札幌ゆきだるまプロジェクトについても知り、グラウンドに耳つきの雪だるまを並べたり、川柳をつくったりしようという意欲へとつながった。

#### ③ 雪をよく見る

札幌管区気象台を訪れた際、雪の結晶を簡単に観察できることを教えていただいたので、グラウンドで実施した。黒の色画用紙を外の空気でも冷やし、降ってきた雪を受けてルーペで拡大して観察した。

まず、同じ時に降っている雪でも、同じ形の結晶ではないことに驚いた子どもが多かった。また、それぞれの形が繊りなす美しさや面白さにふれ、「おお、六角形だ!」「お花みたい」など、一人一人が様々な感性を働かせながら観察することができた。



### (4) 実践のまとめ

子どもたちは、活動を振り返り、「札幌市と雪」をテーマとした雪の結晶型のリーフレットを一人一人が作成した。雪を使って遊ぶ楽しさや雪の美しさなど自分自身が感じたことを表現したり、札幌市の雪対策、そしてそれに関わる人々の工夫や努力についてまとめたりしていたものが多かった。自分自身の体験を基に実感するだけでなく、雪対策に関わる人たちへと視点が広がったり、札幌市民としての自覚が少し芽生えたりと、価値ある実践になったと考える。また、ゆきだるまプロジェクトを通し、雪への親しみも深まったといえる。

### 3. 実践2

#### (1) 単元・題材名

全学年 特別活動（児童活動） 「ゆきだるま大作戦」（2時間扱い）

#### (2) 目標

一年間かけて仲よくなったグループの仲間と雪だるまをつくることを通して、ふれあいの中から上の学年は下の学年に対するいたわりや優しさを、下の学年は上の学年に対するあこがれや尊敬する気持ちをもつ。また、全校でつくった雪だるまが並んでいるのを見ることで雪国札幌の魅力に触れ、雪への親しみをもつ。

#### (3) 取組の様子

##### ① 「ふれあいグループ」の活動

本校では、1年生から6年生までの「ふれあいグループ」という異学年グループを組んでいる。年間を通して、何回か交流し、仲間の和を深めている。本題材は、ふれあいグループ最後の活動であり、低・中・高学年が同じ目的のもと、一つの集団をつくって行う活動である。



##### ② 3人で一つの雪だるまをつくる

低・中・高学年が一人ずつ入った3人が基本的なグループである。一度ふれあいグループの教室に集まり、メンバー確認と打ち合わせをしてからグラウンドへ。雪だるまの頭、胴体の部分となるドッジボール大の雪玉を3人で分担してつくった。滑らかな球体を目指したり、自分が持つことのできるぎりぎりの重さの雪玉をつくったりとさまざまな活動が見られた。また、1年生が秋に生活科の学習で拾ってきたどんぐりなどを部品に、顔をつくったりしている。その過程で高学年が低学年に手を取りながら、優しくかかわる姿が見られた。



##### ③ 学校の塀に飾る

できあがった雪だるまはグラウンドから校舎周りの塀の上へ並べて飾る。この時も、3人力を合わせて自分たちのグループの場所へ運ぶ。パーツごとに分けて運んだり3人一緒に運んだり、高学年が下学年を思いやる姿が見られる。

校舎前の塀にずらっと並ぶ雪だるまは壮観で、地下鉄駅へ向かう歩行者の方々も足を止めて見てくれたり、撮影してくれたりするなど、地域のみなさんにも数日間の雪だるま展覧会を楽しんでもらえるようになってきている。安全上を配慮し、数日間飾った後は塀の上から撤去するようにしている。

#### (4) 実践のまとめ

「雪だるま」は、1年生でも簡単につくることができ、高学年になっても工夫しながら楽しめる素材である。異学年集団の活動ではそのよさが生き、グループ全員が同じ目標をもって取り組むことができる。そのような活動の中で、高学年が低学年をリードし、優しくかかわる姿が生まれ、年々引き継がれてきている。

例年、グラウンドの隅に雪を加工しやすいように水場を用意しているが、今年は当日の気温が高く、雪玉づくりもスムーズに行うことができた。気温を含めた天候に左右されやすい活動ではあるが、今後も取り組み続けていきたいと考える。

### 4. 実践3

#### (1) 単元・題材名

2年 図画工作 「雪のキャンバス」（5時間扱い）

#### (2) 目標

グラウンドを大きな白いキャンバスに見立て、絵の具でつくった色水で着色することを楽しんだり、雪の白の美しさを味わったりすることを通し、雪に親しみをもち、雪を活用して楽しもうとする気持ちをもてるようにする



#### (3) 取組の様子

##### ① 構想を練る

1グループ4～5人のグループをつくり、どんな作品にしようか話し合う。今年のテーマは、自由な発想が生まれるように「雪の海を泳ぐ夢の魚」とした。アイディアスケッチに色付けしながら、「どの色の色水がペットボトルで何本必要か」と計画を立てた。冬休み明けから準備しているペットボトルの本数を確かめて、黒マジックでつくる色や自分の名前を書いて準備したり、「足りないからまたもってこよう」と

打ち合わせしたりと、見通しをもって行動する姿が見られた。ペットボトル1本でどのぐらいの広さを塗れるかを試すため、実際にペットボトルに水を入れ、グラウンドで試した。

## ② 色水をつくる

一人5～6本ほどの大き目のペットボトルを持ち寄り、色水づくりを行う家庭科室へ。たくさんの色水を作ったために一度に持てず、教室と家庭科室を行ったり来たりする子がいるなど、どの子どももとても楽しみにしているのを感じた。

家庭科室でペットボトルに水を入れ、1階ホールで教師に絵の具を注入してもらい、水飲み場でペットボトルを水で満たし、家庭科室で振る。その作業を1本ずつ繰り返し行うだけなのだが、絵の具が溶け、水の色が均等になる様子を楽しみながらただひたすら振っていた。



## ③ 雪のキャンバス

翌日、家庭科室においてあったペットボトルをグラウンドへ移動し、いよいよ活動開始。アイディアスケッチはラミネート加工していたので、それを雪に刺して立たせ、ペットボトルを並べてほしいの広さを決めた。その後、前日に降った雪を丹念に足で踏み固め、いよいよ色水で着色。はじめは恐る恐るやっていた子たちも「もっと下からじゃないとはねちゃうよ!」とか「白いところが残っているからちゃんとぬって!」などと会話しながら、雪の色が変わる様子を楽しんでいた。だんだんと慣れてきた子どもたちは、塗りつぶすだけでなく、ジグザグの線や平行線なども描きはじめ、それぞれのグループの夢の魚を完成させていった。



## (4) 実践のまとめ

雪の白さは、色水と美しいコントラストを生み出す。子どもたちもその美しさや色が変わる楽しさを味わいながら活動しているので、どの子も意欲的に取り組んでいた。テーマを魚としたことも、子どもたちにとって形をとりやすく表現しやすいテーマだったと考える。

活動終了後、3階の図工室の窓からグラウンドを見下ろしたときは、子どもたちから歓声が上がった。自分たちの表現に満足感を味わうことができる題材であり、これからも続けていきたい活動であると考えている。

## 5. 研究のまとめ

本校の雪に関する学習活動は、雪を学びの対象とし子どもたちが直接雪の魅力や価値に触れていくものと、雪という素材を媒介として、その活動の目的を達成していくものに分けることができる。雪を学びの対象とした場合、児童の発達段階や他教科・他領域での学習との関連などを考慮しながら、内容やねらいを定めていかなければならない。

今年度の実践1は、地域社会の人々を学ぶ4年生の発達段階に適した内容であったと考える。今回は、総合的な学習の出口として、リーフレットづくりを取り上げた。建設局雪対策室と教育委員会による「雪と暮らすお話し発表会」に参加し、児童がプレゼンを発表し、子どもの成功体験・感動体験を増やす取組に発展させるなど、これからも工夫する余地がある。

実践2や実践3のように、雪そのものもつ特徴をうまく生かした学習活動は、これからさらに広げていくことができるものであると考える。今回の2実践では、雪のもっている白の美しさや可塑性を生かした学習活動であるが、一つの造形活動を多人数で同時に行うことができるというのが大きな価値であり、また他の素材ではこんなに簡単に取り組むことができないものである。その他にも雪を使った遊びやボランティア活動など、多人数で同じ目的を共有できる活動が少なくない。本校の研究の視点でもある「仲間との豊かなかかわり」が生まれ、子ども同士がお互いに認め合い、支え合える仲間となれるよう、今後も研究を進めていきたい。